

# 建築少年たちの夢

現代建築水滸伝

布野 修司 著

(彰国社・2625円)



ふの・しゅうじ  
1949年生まれ。滋賀  
県立大教授。著書に  
「スラムとウサギ小  
屋」「住宅戦争」  
「住まいの夢と夢の  
住まい」など。

本書は安藤忠雄や磯崎

新を含む九組をとりあげ

た建築家の列伝である。

それぞれの建築家の基本

的な思想や作風の変化を

コンパクトにまとめた入

門書としても読めるだろ

う。といっても、ただ客

観的に人生の履歴を記述

したり、作品のデザイン

分析を中心とした評伝で

例えば、藤森照信を論

じるなかで、最初に出会

った大学院の授業や互い

の家を訪ねたエピソード

を振り返っている。つま

り、同時代を生きた目撃

者の視点から描いた列伝

なのだ。またユニークな

活動を行う石山修武、渡

辺豊和、象設計集団にも

焦点を当てた点は、著者

らしさが感じられる。

各章で紹介される建築

家は、共に飲み歩いた同

世代か、原広司など学生

時代に憧れた上の世代で

あり、四九年生まれの著

者が一番若い。したがっ

て下の世代であるSAN

EAや隈研吾、アトリエ

## 若き日の交流、時代背景描く

・ワンなどはとりあげていない。序章で時代背景を説明しているように、六〇年代のメタボリズムの華々しい建築運動が大阪万博で一段落がつき、オイルショックで不況になった七〇年代が、著者の思考の原点となった。

それは仕事こそ少ないが、近代建築を乗りこえるべく、多くを語り、深い議論を行い、後に世界的な建築家になった伊東豊雄や山本理顕らが自身を鍛え、充電していた期間である。活字になっていない出来事や人間関係から本書で語られる、当時のリアリティーは圧倒的だ。こうした文化を経験していない後の世代にとっては、うらやましい濃密な時間である。

一般的にはポストモダンと括られる建築家たちだが、彼らがどのような「建築少年」だったのかを明らかにし、それぞれの原点を描き出している。

評者 五十嵐 太郎

(東北大学教授)